

資料

臨地実習指導者が抱える指導上の課題と 研修の成果

Educational Issues of Nursing Practicum Instructors and
Effects of Nursing Practicum Instructor Seminar

柳澤 佳代 櫻井 真智子 柴田 香菜子 中田 覚子 小林 睦
吉川 三枝子 八尋 道子 吉田 文子

Kayo Yanagisawa, Machiko Sakurai, Kanako Shibata, Satoko Nakata,
Mutsumi Kobayashi, Mieko Yoshikawa, Michiko Yahiro, Fumiko Yoshida

キーワード：実習指導者，指導上の課題，評価

Key words : Nursing Instructor, Educational Issues, Evaluation

要旨

本調査は、臨地実習指導者の抱えている指導上の課題を明らかにし、課題解決のための研修の成果を確認することを目的とし、2019年度臨地実習指導者研修セミナー修了者27人に実施の自記式質問法によって得たデータを使用した。分析内容は個人属性、調査対象者の実習指導上の課題、セミナーで得られた課題解決のヒント、実習環境調整等の9項目とし、個人属性は量的に分析し、それ以外は質的分析を行なった。

実習指導経験者と実習指導未経験者では抱える課題に共通性と相違性がみられた。両者共通の受講前に抱えていた実習指導上の課題には、【学生との関わりに関する課題】と【指導側に関する課題】があり、課題解決のヒントになったこととして指導方法の原理について学んだことを挙げていた。相違性としては、実習指導未経験者は、学生に対してというより自身に関心が向きやすい傾向にあった。セミナー受講後に実習環境として行ってみたいこととして、人的・物的環境調整において、実習指導者だけでなく職場を巻き込んだ行動をとるとしていた。以上から、セミナーの成果として各セッションでの学びやプロセスを通して、実習指導者として実習環境を調整することの必要性を学びとっていたことが明らかとなった。

受付日2019年10月1日 受理日2020年2月26日
佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

I. 緒言

看護職の育成機関は増加の一途を辿り、看護系大学は272校(文部科学省, 2019)、看護専門学校は1812校(厚生労働省, 2019)となってきた。その教育は、社会変化の多様性に対応する形で、超高齢化時代を生きる人々への支援として地域包括ケアや患者・利用者の権利擁護がより求められる。看護学生はこれらのことを臨地実習で目の当たりとし、実践を通して学びを深めていく。大学、専門学校の認可にあたる省庁の違いはあっても看護基礎教育における臨地実習は必須の授業として行われ、そこでは、技術、思考・判断、行動を統合し、実践能力を育成するために重要な教育の場(池西, 2017)として教員だけでなく臨床現場でも認識されている。そのため、臨地実習指導者(以下指導者とする)が基礎教育課程で学んできた教育内容から変化をしているものもあり、指導者は学生指導に戸惑いと期待を生じやすい。指導への戸惑いの背景として、自身が受けた教育課程とは異なる教育課程で学ぶ学生を指導しなければならないことが考えられる。また、臨地実習の現状について、新規の学校の実習生の受け入れから指導担当時間の増加や臨床業務との兼務による実習指導に専念できない状況が指摘されている(池西, 2017)。

指導者研修会は自治体で開催されているものが多いなか、佐久大学では長野県を中心として近隣の指導者が受講できる「臨地実習指導者研修セミナー」を開催している。その修了者は2010年から今年までに305人であり、修了者の満足度の高さから研修の成果について一定の報告がされている(吉田ら, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017)。しかしながら、セミナー受講の動機となる指導者が抱える課題については明らかにされていない。

そこで、本調査では、指導者が実習指導を行う上で抱えている課題を「臨地実習指導者

研修セミナー」で実施された調査結果から分析し、研修が指導者にとってどのような影響を与えているのかを確認し、今後の指導者研修への基礎的資料の提供を目的とする。

II. 「臨地実習指導者研修セミナー」の概要

佐久大学看護学部では2010年から臨地実習指導者研修セミナー(通称NPIS)の企画担当者を中心に、夏季の3日間を使ってセミナーを開催している。そのプログラムは、受講者が集中しやすいよう各セッションは60分で構成され、指導実践をふりかえりそこから教育観の再構築や指導上の教育原理を学ぶことがセミナーの目的となっている。受講者同士のディスカッションはアンドラゴジーの観点からグループワークでの相互依存を重視している。全10セッションの内容は以下のとおりである。

- 第1セッション「看護学実習の目的と方法」では、ICNの看護学教育の目的を確認するとともに、受講者のこれまでの教育観・学習者観を「ふりかえる」機会とした。また、このセッションは導入のセッションとなるため、アイスブレイキングが取り入れられている。
- 第2セッション「実習指導と看護倫理」では、ジレンマを生じるケースを使って指導者自身の倫理的価値を明らかにし、倫理的感受性や実習における倫理的義務についての知識を深めるようになっている。
- 第3セッション「プロフェッショナリズム」では、21世紀のプロフェッショナリズムの4本の柱と3つの要素について学び、看護職のプロフェッショナリズムについて考える機会となっている。
- 第4セッション「実習での倫理的課題：学生の視点」では、第2セッション・第3セッションの内容と関連させながら、実習での倫

理的意思決定が必要なケースについてグループメンバーと対話しながらアプローチの方法を検討できるようになっている。

- 第5セッション「実習指導に関わる用語の検討」では、各グループで実習指導にかかわる用語について図書館の利用によって文献検討ができるようになっている。
- 第6セッション「用語検討の結果共有」では、第5セッションで調べた用語についてまとめた内容を発表し、意見交換を行い、「看護倫理」の担当講師からフィードバックを得られるようになっている。
- 第7セッション「キャリアビジョン」では、学生・後輩のロールモデルとなる指導者が、キャリアについての考え方を学び、自身のキャリアビジョンを考える機会となっている。
- 第8セッション「インシデントからみる学習支援の検討」では、学生のインシデントの事例を用いて学習支援のあり方やインシデントの背景について、学習者支援の観点から検討できる機会となっている。
- 第9セッション「実習記録へのコメント」では、演習事例の実習記録を用いてどのようにコメントするかグループで話し合い、その後講師からフィードバックを受けることで、実習記録の意味やコメントを書く時のポイントが学べるようになっている。
- 第10セッション「教育観の再構築」では、第1セッションで明らかにした自身の教育観について再構築が行えるようにし、様々な場面であっても指導方法の原理は同じであることが学べるようになっている。

Ⅲ. 調査方法

1. 調査対象者と実施時期、調査方法

調査は研修の全セッションを修了した全受講生(27人)を対象に自記式質問紙調査が2019年8月9日に実施され、回答方法は回答者が紙面またはオンラインを選択でき、いずれも

連結不可能匿名化の調査となっている。分析データは、2019年度臨地実習指導者研修セミナーの企画担当者より提供を受けたものを使用した。

2. 調査内容

全受講者への質問内容として4項目、「回答者の属性」「セミナー参加の動機」「参加しての満足度」「セミナーを受講して実習環境を整えるために行ってみたいこと」と、実習指導の経験が有る受講者への質問として3項目「セミナー受講前に抱えていた指導上の課題」「セミナーを受講して課題解決のヒントになったこと」「セミナー前に抱えていた課題の解決に本セミナーは参考になったか」と、実習指導者の経験が無い受講者への質問として2項目「セミナー受講前の指導上の心配なこと」「セミナーを受講して心配解決のヒントになったこと」とした。

3. 分析方法

分析方法は、個人属性については基礎統計量を算出し、その他の回答が自由記述のものについては、意味内容の類似性、相違性の比較からコード化、サブカテゴリ化、カテゴリ化を行った。内容の妥当性については、5人の研究者で検討を重ね、最終的にカテゴリを【】、サブカテゴリを『』、回答者の記述を「」、コード数を()で示した。

4. 倫理的配慮

本調査の回答データである「臨地実習指導者研修セミナー」(以降、セミナーと称す)アンケート実施については、企画運営担当者から、アンケート結果は報告資料としてまとめることを口頭と書面にて説明を行い、併せてアンケートへの回答は自由意思であり、提出をもって同意があったものとみなした。連結不可能匿名化で実施されているため、個人情報漏洩は考えられない。

IV. 結果

1. 調査対象者の概要

調査対象27人(有効回答率100%)の回答方法の内訳は、アンケート用紙が18人(66.7%)、オンラインが9人(33.3%)であった。

調査対象者の概要を表1に示す。平均年齢は、35.6歳(8.39)であった。実習指導経験者は20人(74.1%)、実習指導未経験者は7人(25.9%)であり、臨床経験年数は、5年以上10年未満が最も多く10人(37.0%)、15年以上20年未満が6人(22.2%)、10年以上15年未満と20年以上はそれぞれ4人(14.8%)、3年未満と3年以上5年未満がそれぞれ1人(3.7%)であった。

最終専門学歴は、看護専門学校が16人(59.3%)、看護系大学が7人(25.9%)、看護短大が3人(11.1%)、無回答は1人(3.7%)であった。回答者の21人(77.8%)は実習を受け入れている。

対象者特性		n	%
年齢 平均35.6歳(8.39)	20歳代	7	25.9
	30歳代	9	33.3
	40歳代	6	22.2
	50歳代	1	3.7
	無回答	4	14.8
臨地実習指導経験の有無	有	20	74.1
	無	7	25.9
看護職としての臨床経験年数	3年未満	1	3.7
	3年以上	1	3.7
	5年以上	10	37.0
	10年以上	4	14.8
	15年以上	6	22.2
	20年以上	4	14.8
	無回答	1	3.7
最終専門学歴	看護専門学校	16	59.3
	看護系大学	7	25.9
	看護短大	3	11.1
	看護系大学院修士課程	0	0.0
	看護系大学院博士課程	0	0.0
	無回答	1	3.7
本セミナー以外の実習指導研修会等の受講の有無	有	9	33.3
	無	17	63.0
	無回答	1	3.7

る教育課程が自身の最終専門学歴とは異なる教育課程の実習を受け入れている。過去に指導者研修の受講経験者は9人(33.3%)、未経験者は17人(63.0%)、無回答1人(3.7%)であった。

2. セミナーへの参加の動機

セミナー参加への背景として、受講者自身の希望による参加は11人(40.7%)、上司または他者から勧めによる参加は15人(55.6%)であり、セミナー参加の動機は半数以上が他者からの勧めであった。本セミナー以外の指導者研修の受講経験が有ると回答した9人のうち3人が本セミナーの受講を自ら希望して参加していた。

3. セミナー参加への満足度

セミナー参加への満足度を0%から100%での記述を求めたところ、その平均は92.7%であった。参加してよかったかの問いには「そう思う」25人(92.6%)、「やや思う」1人(3.7%)であり、セミナー参加の動機が他者からの勧めであった15人は全員が「そう思う」と回答していた。無回答の1名を除いては、全員がセミナーに参加してよかったとしており、満足度(%)の数値の高さがそれを裏付けていた。

4. 実習指導経験者がセミナー受講前に抱えていた実習指導上の課題

実習指導経験者への質問「本セミナー受講前にご自身が抱えていた実習指導上の課題は何でしたか」への自由記述は表2の通りであった。

【学生との関わりに関する課題】と【指導側に関する課題】の2つのカテゴリが抽出された。【学生との関わりに関する課題】は、『学生との関わり方』(10)、『特定の学生への関わり方』(3)、『学生との距離感』(2)の3つのサブカテゴリからなり、最も多い『学生との関わり方』(10)では、どのような関わり方

表2 実習指導経験者がセミナー受講前に抱えていた実習指導上の課題

カテゴリ	サブカテゴリ	内容	(原文を常体文に統一した)
学生との 関わりに 関する 課題	学生との関わり方(10)	学生との関わり方(3)	
		学生との接し方	
		学生に対する態度	
		看護学生さんとの対話	
		うまく伝わらない	
		学生に対して実習でよかったと思ってもらえるには、どういう関わりがよいのか	
		指導に必死で学生の立場に立てていない	
		今の学生の傾向を知りたい	
		自発性があまりない学生へのアプローチについて	
		発達障害と思われる学生への関わり方	
指導側に関 する課題	特定の学生への関わり 方(3)	ジレンマへの関わり	
		看護学生さんとの距離	
		どこまで指導者として踏み込んでよいのか	
	自身の指導方法(5)	自信を持って指導ができない	
		自身の指導が学生にとってよいのか不安	
		自分の指導方法で良いのか	
		指導になっているのか	
		自身の指導について	
	自身の教育観・看護感 (2)	自身の教育観	
		看護師としてすべきことは何か	
指導体制(2)	学校での指導と臨床のずれ		
	指導者が日々違うため一貫した指導を行うにはどうしたらいいか		
コメントの方法(2)	コメント方法		
	記録へのコメント内容		
実習の進め方(1)	実習の進め方		
指導内容の程度(1)	どこまで指導したらいいか		
指導に関する知識(1)	臨床指導者としての知識がないこと		

記録単位 29

がよいのか、学生に対する接し方や態度・対話について課題があるとしていた。『特定の学生への関わり』(3)では、自発性のない学生や発達障害が疑われる学生など特定の学生との関わり方、学生が実習中にジレンマに遭遇した場面での関わりについても課題だとしていた。【指導側に関する課題】では、7つのサブカテゴリで構成されていた。『自身の指導方法』(5)では、自身の指導方法が学生にとって良いのか不安があり、自信をもって指導できていないことが課題であると回答していた。その他のサブカテゴリは、自信をもって指導することができない具体的な内容が挙げられており、『自身の教育観・看護観』(2)、『指導体制』(2)、『コメントの方法』(2)、『実習の進め方』(1)、『指導内容の程度』(1)、

『指導に関する知識』(1)などが課題として挙げられていた。『特定の学生への関わり方』(3)、『指導体制』(2)についてのサブカテゴリは、実習指導経験者のみが回答していた。

5. 実習指導経験者がセミナーを受講して課題解決のヒントとなったこと

実習指導経験者に対して「セミナー前に抱えていた課題解決に本セミナーは参考になったか」の問いに、「思う」18人(90.0%)、「やや思う」1人(5.0%)と回答しており、無回答の1人(5.0%)を除いて、ほぼ全員が課題解決のためのヒントを得ていた。「本セミナーを受講して課題解決のヒントになったことは何ですか」についての自由記述回答からは、10のカテゴリが抽出された(表3)。【学生を一番

に考え、支援する】(4)では、指導者の第一義的な責任は学生にあり、学生を第一に考え支援するという指導者の役割について学んだことが課題解決のヒントとなったとしており、これは【学生との関わり方】や【学生との距離感】について課題があると回答した人に多くみられた。【指導者としての姿勢】(4)、【指導方法の多様性】(3)、【学生を褒める】(3)では、学生と関わるときの具体的な関わり方や姿勢として、学生と共に学ぶ姿勢や同じ方向性で看護を展開していくことや様々な指導があってよいこと、学生を褒めることなど指導者として学生と関わるときの姿勢についての回答が得られた。【教育観・再構築】(3)、【倫理・プロフェッショナリズム】(3)、【コメントの仕方】(3)では、講義で学んだ内容

が課題解決のヒントとなったと回答していた。

6. 実習指導未経験者がセミナー受講前における指導上での心配

実習指導未経験者がセミナー受講前の指導上の心配なこととして抽出されたカテゴリは、実習指導経験者が抱えている課題と類似性を示した。一方で実習指導未経験者に特有のカテゴリとしては、「こんな自分が指導してもよいのか」、「学生指導できるほど立派な看護師ではないという思いが強かった」という【指導する自分】(2)に関するものであった。

7. 実習指導未経験者がセミナーを受講して心配への解決のヒントになったこと

実習指導未経験者の心配への解決のヒント

表3 実習指導経験者がセミナーを受講して課題解決のヒントとなったこと

カテゴリ	内容 (原文を常体文に統一した)
学生を一番に考え、支援する(4)	学生を第一義的に考える 臨床指導者は学生を一番に考えるということ 指導者は学生を第一に考え支援しなければならない 学生の考えていることを「支援」という考えを知れた
指導者としての姿勢(4)	学生と共に学ぶ姿勢 ダブルバインドせずに伝える 最初に学生と一緒に確認していくことで同じ方向をむいて看護が展開できると気づいた 発想を変えれば結果も変わる
指導方法の多様性(3)	色んな指導方法があってよいのだということ 到達点は一つだがそこにいくまでの過程はいくつもある 様々な指導があり、一貫性があれば間違った指導はないということ
学生を褒める(3)	もっと学生のできることに目を向け、褒めることができるようにしたい ほめることで学生が変化することを再確認した まずはどんなことでもとりあえず褒める
教育観・再構築(3)	教育観再構築の講義(2) 看護の教育観
倫理・プロフェッショナリズム(3)	倫理 アドボカシー プロフェッショナリズムに関して
コメントの仕方(3)	次の学習につながるコメントの仕方 実習記録のグループワーク コメントに対してのディスカッション
今までの指導を振り返る(2)	学生に対して出来ていないことばかり伝えてしまっていた 指導してきたことの正解の理由付けがされた
学生の現状を知る(1)	改めて「今」の学生の状況が知れた
学習状況を踏まえた指導(1)	学生の段階に合わせた指導が必要

記録単位 27

は【学生を一番に考え、支援する】(5)、【看護倫理・ジレンマについて知る】(2)があった。これは実習指導経験者と類似していた。

8. セミナーを受講して実習環境を整えるために行ってみたいこと

受講者全員への質問「本セミナーを終えた今、実習施設で実習環境を整えるためにあな

表4 実習環境を整えるために行ってみたいこと

項目	カテゴリ	内容 (原文を常体文に統一した)
人的環境調整	セミナーで学んだ内容を伝える(12)	上司に理解を求める
		まず、科長にこんなことを学んだと伝えたい
		セミナーで受講したことを院内で学習会などで共有したい
		講義内容を職場に浸透させるべく伝達講習したい
		またチームで病棟へも3日間学んだことを伝えていく
		学んだことを病棟NSに伝えたい
	指導者の姿勢(8)	指導者、スタッフ、病棟に対しての伝達・拡散
		指導者だけでなく病棟スタッフすべてに対して、今日学んだことを伝達したい
		病棟スタッフへのインフォメーション強化
		スタッフ教育
		学生指導に関した勉強会
		学生を受け入れる前に本セミナーで学んだことを伝えたい
学生を受け入れる環境を整備する(6)	まず、もう一度実習要項を読む	
	この実習で学生は何を学びたいのか、しっかり把握しスタッフに伝える	
	オリエンテーションの段階から自分の態度と言動を一致させる	
	学生の知りたいところから伝えていく	
	ポジティブ心理学を実践していきたい	
	指導者としてどのような指導をしたいのかを伝えていくこと	
学生を認める、褒める(5)	指導者として肩肘張らず学生と一緒に学んでいこうと伝えたい	
	夜勤者に質問したいことがあるか学生に確認する	
	学生が来たいと思う楽しいと思える環境づくりをしたい	
	学生さんの学べる環境づくりのためにもう少し環境について話し合いたい	
	指導者以外は学生と関わる事がないもっとアットホームな感じで、病棟全体で学生を受け入れる雰囲気づくりをしたい	
	学生をチームに引き込みたい	
学生の理解(4)	学生を否定から入らない指導係の育成	
	新人指導しかしていない病棟であり、新人に教えるように指導したら学生はつぶれる。学生が学びやすい病棟に周知していかなければならない	
	ほめること(2)	
	認めること(2)	
	できている所を見つける	
	学生と対話する時間をもっと作りたい	
実習指導の人員確保(3)	学生の理解、関わり方の学習	
	学生さんのジレンマを知り、解消できるような関わり方をひろめたい	
	実習中は常に臨床指導者がいて、学生さんを支えられるような環境になるよう働きかけたい	
	学生だけに専念できるよう1日の中で学生担当を1人つけられるようにしたい	
	実習指導者の位置づけを師長へ提案し、担当者を確保して日勤が組めないか相談する。また、同様のことをスタッフへ周知する	
	学生が落ち着いて記録や学習できるスペースの確保(ナースステーションではない別室)	
スペースの確保(3)	学生がしっかり休みをとれる休憩室を確保、更衣室を確保	
	学生さんたちとゆっくり話す場所を確保したい	

記録単位 41

たが行ってみたいことを、人的・物的環境の視点からご記入ください」についての自由記述の結果を2つの項目で整理した(表4)。人的環境調整の質問項目は6つのカテゴリで、物的環境調整は、2つのカテゴリで構成された。人的環境調整で最も多かったカテゴリは、【セミナーで学んだ内容を伝える】(12)で、伝えたい相手は、「上司」が2人、「院内」が1人、「職場・病棟」が7人であった。次に【指導者の姿勢】(8)は、学生の学びたいことを確認することや指導時の一貫した態度や方針を学生に伝えることについて書かれており、【学生を受け入れる環境を整備する】(6)では、学生を受け入れるために「楽しい」「アットホームな」「学生をチームに引き込む」「学びやすい」環境を整えたいが挙がっていた。【学生を認める、褒める】(5)、【学生の理解】(4)では、学生を第一義的に考え、支援する記述内容であった。物的環境調整では、【実習指導の人員確保】(3)と【スペースの確保】(3)の2つのカテゴリがあり、指導者が実習指導に専念できるような調整と学生が学習・記録・休憩できるような場所の調整をしたいという記述がみられた。

V. 考察

本調査は、臨地実習指導者が抱える指導上の課題と研修の成果を明らかにすることを目的として実施し、実習指導経験者と未経験者それぞれが抱える指導上の課題には共通性と相違性があること、またセミナー受講は、抱える課題へのヒントとなっていることが明らかにされた。

1. 実習指導上の課題とその解決のためのヒント

指導経験者、未経験者を問わず、学生に対する接し方や態度・対話について課題があるとしており、その背景として指導者の大半は、

自身の最終専門学歴とは異なる教育課程の実習指導をしなければならず、自身の経験値だけでは学生の様子や傾向、レディネスが把握しにくく、指導方法に課題を抱える要因となっていると考えられた。このことは、『学生との距離感』がつかめないという記述につながっていることも否定できず、指導に戸惑いを感じさせやすい。臨地実習指導者に求められる能力として、看護師としてモデルを示すだけでなく、「学生の力を見極め、引き出す力」の必要性を指摘している(池西, 2017)。本調査結果から、指導経験者・未経験者にかかわらず受講前は「学生の力を見極め、引き出す力」についての課題を抱えており、セミナーを通して、教育とは何を教えるかではなく、学生が何を学ばなければならないかという教育の原理に立ち戻り自らの指導方法をリフレクションし、学生の学ぶ力を引き出し支援する具体的な方法を自身の例としてイメージできたことが課題解決のヒントとなったのではないかと推察した。

2. セミナーを受講して実習環境を整えるために行ってみたいこと

セミナーのセッションとして特段挙げなかった「実習環境の調整」についての質問からは、多くの指導者が、セミナーを通して自身の指導だけをふりかえるのではなく、実習環境についても考える機会となっていることがわかった。病棟を巻き込んで実習環境を整えることは、セミナー受講前には気づいていなかったことであり、実習指導イコール自身の指導であった考えから、実習指導者役割の遂行には、指導者だけでなく病棟・施設全体として実習を受け入れる環境の重要性を認識するに至ったことが考えられた。セミナーの内容を周りの人に伝えたいという回答があるように自身でも腑に落ちた内容になったとも推測できる。これは先行研究でも、スタッフの臨地実習に関する知識を育てることが、指導者の困難を

軽減する可能性がある(押領司ら, 2016)と示唆しており、病棟全体で実習環境を整えることは、学生が看護に集中(看護実践)しやすい環境をつくり、指導者が指導しやすい環境になると考える。

3. 臨地実習指導者研修セミナーの成果

セミナー参加の動機が、自らや他者からにかかわらずセミナーの満足度が高かったことは、セミナー内容が対象者のニーズに対応していたと考えられる。このセミナーの過去2年間の参加動機は約8割が上司または他者からの勧め(吉田ら, 2017)であったことから比較すると自ら参加した人の割合が増えており、参加者の多くは自身の受講動機を持って参加する傾向にあるといえる。また、すでに本セミナー以外の指導者研修の受講経験が有るにもかかわらず、本セミナーの受講を自ら希望していた者もあり、実習指導において戸惑いや課題を抱えていることが推察された。

さらには、このセミナーは、演習と講義を組み合わせており、ディスカッションがしやすい環境をつくっている。自ら参加を希望した参加者が多かったことは、その話し合いにより積極性を持たせ、知識獲得がしやすい環境だったと考えられた。

今後の課題として、指導者が課題として挙げた実習環境の実態についてその現状を把握することが求められる。

VI. 結語

本調査によって臨床指導者の抱えている指導上の課題と課題解決のための研修の成果は以下を確認した。

1. セミナー受講前に抱える指導者の課題は、過去の実習指導者経験の有無により異なっていた。指導経験者は学生との関わり方と指導する自身への課題であったことに対し、指導未経験者は自身が指導して

よいのかという自身に関する課題であったことから、指導役割を担う看護師への支援(相談役)の必要性が確認できた。

2. 指導経験者、未経験者にかかわらず、指導者の大半は、セミナー前に抱いていた自身の課題に対し、解決できそうだとしていた。課題解決のヒントは、指導経験者、未経験者にかかわらず、指導者は学生に第一義的な責任があることを学べたこととしていた。
3. 指導者は、人的・物的環境について、病棟・施設全体で学生を受け入れる実習環境の調整をすることの重要性に気づいていた。

謝辞

アンケート調査にご協力くださいました受講者の皆様に感謝申し上げますとともに、臨地実習指導者研修セミナーに協力へのご理解をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

文献

- 池西静江(2017). 臨地実習の意義. 池西静江, 石束佳子編集, 臨地実習ガイダンス: 看護学生が現場で輝く支援のために. 2-5. 医学書院.
- 厚生労働省. 看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査: 調査の概要, 2019/9/20, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1a.html#list08>
- 文部科学省. 看護系大学に係る基礎データ, 2019/9/20, 文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2019/05/27/1417062_4_1.pdf
- 押領司民, 河西光子, 森川三郎, 山本富士子, 浅川歩, 棚本知砂美, ……瀧口美香(2016). 臨

- 地実習指導者が役割の中で感じている臨地実習指導における困難の因子分析. 日本看護学会論文集 看護教育, 46, 163-166.
- 吉田文子, 堀内ふき, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, 鈴木千衣, ……征矢野あや子(2012). 「臨地実習指導者研修セミナー2011」報告: 修了後のアンケートからみた評価. 佐久大学看護研究雑誌, 4(1), 59-65.
- 吉田文子, 征矢野あや子, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, 鈴木千衣, ……堀内ふき(2013). 「臨地実習指導者研修セミナー2012」報告: 修了後のアンケートからみた評価. 佐久大学看護研究雑誌, 5(1), 31-37.
- 吉田文子, 高木桃子, 征矢野あや子, 橋本佳美, 水野照美, 宮崎紀枝, ……堀内ふき(2014). 「臨地実習指導者研修セミナー2013」報告: グループワークがもたらすグループ・ダイナミックスの形成過程とその背景. 佐久大学看護研究雑誌, 6(1), 29-38.
- 吉田文子, 内山明子, 梅崎かおり, 橋本佳美, 鈴木千衣, 八尋道子, ……堀内ふき(2015). 臨地実習指導者研修セミナー評価: 看護管理者によるセミナー追体験後のアンケート. 佐久大学看護研究雑誌, 7(1), 55-64.
- 吉田文子, 清水千恵, 中澤淑子, 橋本佳美, 鈴木千衣, 八尋道子, ……堀内ふき(2016). 「臨地実習指導者研修セミナー2015」評価: 目標達成度と自由記述に焦点をあてて. 佐久大学看護研究雑誌, 8(1), 91-99.
- 吉田文子, 清水千恵, 塩入とも子, 大和田由希, 橋本佳美, 鈴木千衣, ……吉川三枝子(2017). 「臨地実習指導者研修セミナー2016」評価: 指導へのモチベーションへの向上. 佐久大学看護研究雑誌, 9(1), 41-50.
- 吉田文子, 柳澤佳代, 八尋道子, 大和田由希, 阿藤幸子, 鈴木千衣, ……吉川三枝子(2018). 「臨地実習指導者研修セミナー2017」評価: プロフェッショナリズム導入の効果. 佐久大学看護研究雑誌, 10(1), 67-76.